



川瀬 汎二さんと、なぜか鈴木サトさん



演習場のど真ん中にある牧場に立つハウスの屋根に川瀬さんは憲法の前文と九条を大書を

## 総理大臣の自爆テロで、北海道の開拓農家を思い出す

北海道東部にある「矢白別演習場」。日本一広い自衛隊の演習場です。数年前からは、米軍の演習もおこなわれるようになっていきます。

そのど真ん中で、反戦を訴えて酪農をつづけてきた人がいます。川瀬 汎二さん。資料によれば、

1952年に26歳で入植、馬1頭で16haの原野を開拓。まもなく陸自演習場が作られ、近隣農家は次々離農。川瀬・杉野さんの2戸だけ止まる。杉野さんが1977年に離農し、川瀬一家だけになる。

という経緯だそうです。

その後、外国航路の大型貨物船の船長をなさっていた方が、川瀬さんに共鳴し、同地に移住しました。浦舟三郎さん。いま現地から、インターネットで「週間矢白別」を発信しています。その9月7日付から転載します。(無断)

\*

米誌ニューズウィーク最新号はアフガニスタン戦争開始以来の米軍秘密情報機関のピンラディン追跡の経過を特集しているという。この中で米軍特殊

作戦の専門家である海軍大学院のジョン・アキーラ氏は、

最近の米軍の作戦状況を「米軍は米兵の死亡一人に対し百人のゲリラを殺害している」としながら、米軍による「この殺害率は不適切で非生産的」と指摘。同校アフガニスタンの専門家トマス・ジョンソン氏は「一人を殺害すると、それは何倍にもなって跳ね返ってくる。男性の親せきすべてをたたかいに参加させることになる」

と、米軍の作戦がテロ撲滅どころか、テロリストを増産していることを指摘しています。

これを読んで船乗り時代の見聞を思い出した。もう35年も前の話。ペレシヤ湾の南部にドバイという港があります。出稼ぎに来ていた港湾労働者の話。確か当時はソ連がアフガンに軍事介入をしていた頃です。労働者曰く「我が部族を侵す奴は決して許さない、その為に俺は働いているんだ」と。侵略されているアフガンの労働者だったので。

私はその直前にクウェートの港でパレスチナからの労働者と話す機会があった。もう争いは止めたらと拙い英語で話したら、「俺が止めたら“民族の独立”を誰がやる、自分の子どもにも、この闘いを続けることを教えている」と。この時、中東の紛争が如何ほど難しいか

を認識した。

テロ特措法が如何にも正義の法律のようにアメリカよりのメディアは宣伝しますが、とんでもないと思う。論より証拠、6年経ってもテロは治まりそうにありません。

\*

そんなテロ特措法を口実にして、シン坊が総理大臣ごっこを投げ出しました。無責任だという非難が与党からも出されています。

が、そんな首相を選出したのは、自民党や公明党のセンセたちじゃん。自分たちの反省はないのかい？

で、そんな代議士たちを選んだのは有権者の一票です。

郵政だけで多数をにぎった与党によって、すでに教育基本法は改悪され、憲法改悪の時限爆弾も仕掛けられてしまっています。日本農業を壊滅させるといわれるオーストラリアEPA交渉などにも道がつかしました。そんな暴走首相の自爆テロは、9.11の翌日なんだねえ。



(<http://www4.ocn.ne.jp/~shusan/> から)